What makes my heart sing?

いき♂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｗｈａｔ　ｍａｋｅｓ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ　ｓｉｎｇ？

【Ｎコード】

Ｎ８８４６Ｚ

【作者名】

いき♂

【あらすじ】

短編企画「イヴに世界とキミと」参加作品です。

日没と共に降り出した雪は夜更けを待たずに積もり始めた。しんしんと降り続く雪は、ただでさえ閑静な田舎町をさらなる静寂に塗り込めていく。

凍てつく夜に好んで外出する住人はほとんどいない。路面の雪には靴跡ひとつなく、街路灯の光を反射して白く輝いていた。

このあたりは昼間であれば地平線まで見渡せるほどの田舎町。まばらな街灯と少ない民家の窓から漏れる光、そしてかろうじて一軒だけ営業しているコンビニの看板――それら以外ろくな光源がなく、周囲は濃い闇に覆われている。

不意に、闇が切り裂かれた。一瞬、地平線がくっきりと浮かび上がる。

再び覆い尽くす闇の中、遠方で音が響く。長く尾を引く様子からはかなりの轟音であることが窺われる。

その音はコンビニでアルバイト中の吉田俊樹（としき）の耳にも届いていた。

「ありがとうございました」

カウンターの内側から笑顔を振りまき、出て行く客を見送った後で俊樹は独り言を呟いた。

「さっき光ったよな。雪起こしの雷か。太平洋側なのに珍しいな……」

俊樹としては小声のつもりだったが、高校では合唱部に所属していた彼の声は良く通る。自動ドア越しにぼんやりと夜空を見る彼の背後から返事がきた。

「雪起こし？　何、それ」

高めながら耳に心地良い声。反射的に「いい声だ」と声に出した俊樹は、振り向いた拍子に意外なほど近くに立っていた人物とばっ

ちり目が合い、上体を仰け反らせて視線を泳がせる。
「あ、いや……。ごめん、鈴木さん」
返事の主は栗色の前下がりボブの女の子。小さめの顔に大きな瞳というのは好き嫌いの分かれるところだろうが、鳶色の澄んだ瞳には相手を吸い込む魅力がある――俊樹は秘かにそう評価している。
「花蓮（かれん）って呼んで。あたしだけ俊樹って呼んでるのに、なんか不公平だよ。同じ大学の一回生同士なんだし」
その声に、俊樹は再び彼女と目を合わせた。今、彼女は大きな瞳を左右非対称に細め、頭一つ低い位置から視線を突き刺している。ただ、わざとらしく唇を突き出しており、不満そうな声には冗談めかした柔らかい響きが含まれていた。姿勢良く腰に手を当てている様子と相俟って、とても愛らしい仕草だ。
緩む頬を引き締めるため、俊樹は軽く頬を叩きながら返事をした。
「ごめん、女の子を下の名前で呼び捨てにするの苦手なんだ。自分が呼び捨てにされるのは全然構わないんだけどね。それにバイト中はあんまりそういうのは――」
そんな彼の様子をどう受け取ったのか、花蓮は口元に手を当てくすくす笑うと追求の手を緩めた。
「ここ田舎だからそんなこと気にするお客さんいないって。無理にとは言わないけど、できれば慣れてよね。あたし名前で呼ばれる方が好きだから。……それで、雪起こしって何」
雪起こしとは日本海側の雪の多い地方に見られる現象で、真冬の雷を指す言葉である。大雪の前触れとされているが、科学的に因果関係が証明されたわけではない。
「ふうん。あたしの地元はここだけど、俊樹って雪国の人なんだ。じゃ、これから大雪になるのかな」
「どうかな。ここは太平洋側だし、ほとんど積もらないうちに雪も止んでいるし」
「そっか。五センチかそこらなら、俊樹にとっては積もったうちに入らないんだね」

今夜はクリスマスイブ。田舎のコンビニとは言え、夕方まではクリスマスケーキの予約客などでそれなりに込んでいた。しかし、雪が積もったことで客足が遠のいている。午後十時の閉店時間まで残り一時間を切った。今夜はもうお客さんが来ないかも知れない。

そんなわけで雑談に興じていた二人だったが、俊樹はふと店内の時計に目を留めた。

おかしい。閉店まで三十分を切っている。どのシフトの時でも開店後と閉店前の一時間ずつは店にいるはずの店長が、今日はまだ姿を見せない。

「いいじゃない。店長だって雪でお店に来るのが億劫なのかも知れないし。店長の家知ってるから、店閉めた後で鍵を届ければいいし」

「そういえば鈴木さんの方がここのバイト長かったね。前にも施錠したことが？」

花蓮は事も無げに「あるよ」と答えて微笑んだ直後、ひとつ瞬きをして表情を凍り付かせた。

店内に影を落とすほど外が明るく光ったのだ。

ひと呼吸の間を置いて、雷鳴が鼓膜に突き刺さる。地響きさえ伴うほどの轟音だ。

俊樹の胸に栗色の物体が勢いよくぶつかった。かろうじて踏ん張った彼の鼻孔をほんのり甘い香りがくすぐる。

「あ、ごめん」

花蓮は謝ると、すぐに身体を離した。彼女から目を逸らした俊樹は、不自然に持ち上げていた手で後頭部を掻きつつ天井を見上げ、ばつが悪そうに照れ笑いをしていた。

その後、閉店まで客も店長も来ることはなかった。

「壊れてるのかな……。呼び出し音もしないの」

施錠と消灯を済ませた俊樹がスタッフルームに入るなり、花蓮がそう声をかけてきた。閉店の報告をしてから鍵を届けるため、彼女が店長宅に電話をしていたのだ。

「店の固定電話がおかしいのかも。それなら携帯で……あれ。圏外だ」
ポケットから携帯を取り出した俊樹に続き、花蓮も自分の携帯を取り出すと「あたしのも」と呟いた。
「どうしよう。いつも親に迎えに来てもらうのに」
「送ってく送ってく。俺の車で」
つい繰り返してしまった俊樹は顔を赤らめて横を向き、「……迷惑でなければ、だけど」と小声で付け加える。
「迷惑なわけないじゃない。むしろお願いします。こんな日にバイトしてるくらいだもの……」
『こんな日』とはクリスマスイヴのことだろうと当たりをつけ、続く言葉を脳内で補完しかけた俊樹は、あわててその考えを追い出した。相手はこのバイトで初めて知り合ったばかりの、まだつきあいの浅い女の子だ。あまりプライベートな部分に踏み込むわけには……。ついぼんやりとしてしまった俊樹に、花蓮が微笑みかけてきた。
花が開くような笑顔に触れ、眩しげに眼を細めた俊樹だったが、ふと思案顔になった。
「ところで親御さん、ここの閉店時間ご存知だろ。連絡せずに帰ったとして、行き違いになったりしないかな」
「ああ、その点は大丈夫。時計なんて気にしてないから、あたしが電話するまで寝てるのよ。さすがにお酒は飲まずにいてくれるけど」
あっけらかんと言い放つ花蓮に対し、俊樹は口を開けたまましばらく固まってしまった。
「まるでウチの親みたいだな。年頃の娘を持つ親御さんにしては珍しくないか、それ」
「良家の子女ならいざ知らず。あたしん家みたいな中流階級、女の子の親も男の子の親も似たようなものよ。……多分」
立ち上がった花蓮は、すでに店の制服から私服の白いフェイクファーハーフコートに着替えていた。

着替え始めた俊樹に背を向けて店員通用口から駐車場に出ようとした花蓮は、黄色い悲鳴を上げた。
開いた扉の隙間から強烈な光が差し込んできたのだ。
回れ右をした花蓮が真正面から俊樹に飛びついてくる。
まばたき一つの間を置いて、地面が割れて天が落ちてくるかのような音が轟いた。
俊樹の心臓が跳ね上がる。
「ごめん。今のは俺も恐かった」
そう言いながら花蓮の背をさする俊樹は、彼女に悟られないように軽く息を吐いた。

俊樹が運転する車の助手席で、花蓮は俯き、恥ずかしそうに言った。
「なんか、ごめん。いい歳して雷を恐がったりして」
「そんなこと気にする必要ないって。さっきのは俺だって恐かった」
……むしろ嬉しくてドキドキしたよ。続けようとした言葉を声に出せず、出しかけたくしゃみが途中で止まったようなもどかしさに歯がみした俊樹は、（今まで女の子とつきあった経験がないもんな）と埒もない自虐的な呟きを胸中に漏らす。
花蓮がどんな顔をしているのか気になった俊樹は、ちらと助手席を窺った。すると――。
「なにあれっ」
大きな目をさらに見開いて前方を指差す花蓮に促され、俊樹も前を向いた。思わず急ブレーキを踏んだ俊樹は、花蓮を大きく前傾させる愚を犯してしまう。
気遣う俊樹を手で制し、「大丈夫大丈夫。それより外よ。ＵＦＯかも」と興奮してまくしたてる花蓮。彼女は、俊樹が車を路肩に寄せて停めるのももどかしげに路上に降りてしまった。

あわてて彼女の背を追う俊樹の視界の中、複数の白光が舞い踊る。彼らが見上げる空で、十を超える円盤形の光が素早く不規則に移動している。ジグザグに動き回るせいで距離感がいまひとつ掴めないが、百メートルは離れているだろうか。一つずつの円盤の長径は五メートル前後、乗用車くらいだ。

俊樹がふと周囲を見回すと、先行していた車、後続車、みな一様に路肩に停車して車を降りていた。彼の視界の範囲内だけでも三人ほど、カメラ付き携帯電話を空に向けている者がいる。

「っ……！」

突如、強烈な閃光が居合わす人々の目を射る。真昼の陽光なみの光の奔流。ほぼ全員が手で目を覆ってその場に蹲る中、俊樹は視界の隅で確かに捉えた。

――雷なんかじゃない、ＵＦＯだ。奴が、撃ちやがった！

雷鳴。閃光とほぼ同時だ。一人の例外もなく手で両耳を押さえる。花蓮より先に手を耳から離した俊樹は、中腰になって周囲を見回す。路上に転がる物体を見て目を見開いたが、ひとつ頭を振ると花蓮の肩に手を置いた。震える声で告げる。

「鈴木さん、車に乗るんだ。逃げるぞ」

力一杯両耳を押さえている花蓮にはどうやら俊樹の声が聞こえていないようだ。彼女の肩を揺すり、さらに呼びかける。

「鈴木さん。……花蓮！」

「えっ」

花蓮は顔を俊樹に向け、ようやく手を耳から離すと立ち上がった。

「今のは雷なんかじゃない。あの円盤からの攻撃だ。とにかくここから逃げよう」

こくんとうなずいた花蓮は「何か、焦げ臭い」と呟き、周囲を見回そうとする。

「見るな」
俊樹の制止は間に合わず、花蓮はそれを見た。音を立てて息を吸い込み、手を口に当てて震える。
路上では人の形をした炭が三体、燻っていたのだ。
いずれも携帯カメラを操作していた人物……だろう。
「うわ、うわあぁ」
誰かが叫んだ。
その場の全員が、一斉に走り出す。
俊樹も走った。花蓮の手を引いて。
エンジン音が聞こえる。
「おい、降りろよ。俺の車だぞっ」
俊樹の叫びがエンジン音に掻き消される。
空噴かしの爆音を上げるのは俊樹の車だ。見知らぬ男が乗っている。夢中になって発車を止めようとする俊樹の視界に、すぐそばの歩道に倒れて手を伸ばす女性の姿が過ぎる。
「タカシ！　あたしを置いてかないで」
どうやら、恋人さえ見捨てて自分だけ助かろうという魂胆の輩らしい。頭に血が上った俊樹は声を限りに怒鳴った。
「降りろこの野郎っ。恋人を置き去りにするのか意気地なしめ」
俊樹の叫びも空しく車は動き出す。しかし、急発進の直後にタイヤは雪上をむなしく滑り、十メートルも進まぬうちに斜めを向いた車体は対向車線へはみ出してしまった。
耳をつんざくクラクション。花蓮の手を握ったまま、俊樹は両肩をびくりとふるわせた。
間を置かず響き渡る無機物の悲鳴。金属の塊同士が激しくぶつかる衝突音だ。
割れるヘッドライトとフロントガラスの破片が飛び散り、街灯や他の車のヘッドライトを浴びて夜空にきらきらと光の粒を振りまいた。
正面衝突。対向車線を走ってきた車と俊樹の車が、フェンダーを

大きくへこませて無残なスクラップとなり果てた。
対向車はかなりのスピードだった。しかも、俊樹の車を奪った奴はシートベルトを着用した様子がない。エアバッグだけでは衝撃を吸収できない。それどころか命に関わる骨折をしたことだろう。
俊樹の車は走り出したばかりであり、周囲の歩行者に被害はない。自分の車が凶器とり、歩行者を巻き込む惨事につながる……という最悪の事態を免れたことが、俊樹にとってのせめてもの救いと言える。
「タカシ……。き、救急車。救急車呼ばなきゃ」
さきほど倒れていた女性が立ち上がり、俊樹の車へと駆け寄っていく。
「もう、なんで圏外なのよっ。誰か、救急車呼んでよ……あっ」
女性は半ばヒステリー気味に声を荒げた。駄々っ子のように手を振り回した拍子に携帯を落としてしまう。路上を滑る携帯を追って女性が手を伸ばすが、それは俊樹の車の下へと潜り込んでいく。ほとんど意味を成さない声を漏らしつつ、女性が地面に這いつくばった瞬間――。

再び、あたりが真昼と化す。
ほとんど反射的に、俊樹は花蓮を押し倒すようにして彼女の上に覆い被さった。
轟く雷鳴、そして耳を聾する爆音。

「俺の車が……。俺の車の中で人が……」
立ち上がったものの放心して呟く俊樹の腕に、花蓮がぶら下がるようにしがみついてきた。
「俊樹！　とにかく今は、ここから逃げよっ」
俊樹は花蓮に視線を合わせると、ひとつ瞬きをしてから無言で頷いた。再び自分の車に視線を戻す。視線の先――炎上する俊樹の車の脇で、携帯を落とした女性が横座りの姿勢で震えている。命に別

状はなさそうだ。
夜空を見上げる。女性には興味を示さず、ＵＦＯが別の獲物を探すかのように飛び去っていくところだった。時折、遠方で稲光が奔(はし)り雷鳴が轟く。目を懲らせば、別のＵＦＯが地上を攻撃している様子がはっきりとわかる。
「間違いない。黒焦げになった人と言い、今の攻撃と言い……。奴ら、電源の入った携帯を攻撃しているんだ」
根拠は甘いが、俊樹は直感に従って断言した。直感を疑う余裕は今の俊樹にはない。
「花蓮。携帯の電源、切っておくんだ」
言うが早いか、俊樹は自分の携帯を操作して電源を切る。そして、口に手を当て周囲に呼ばわった。
「みんな、聞いてくれ。あのＵＦＯ、電源の入った携帯を攻撃している。携帯の電源を切れっ」
ふと気付くと、周囲は悲鳴と怒号、さらにはエンジン音とクラクションの坩堝と化している。俊樹の声に耳を傾ける者はほとんどいない。
徒労感に苛まれつつも、俊樹は花蓮の手を引いて走り出し……、すぐに足を止めた。
「きみたち、車盗られて困ってるだろう。よかったらオレの車で送っていくぜ」
俊樹たちの目の前に現れた人物が、傍らに停車中のセダンの屋根に手を置いた姿勢で話しかけてきたのだ。
常であれば、俊樹としては目も合わせず脇をすり抜けていたことだろう。何しろその人物――おそらく三十歳前後の男性――は、バンダナと黒い革ジャンという、八〇年代ロックアーティストを彷彿とさせる勘違いファッションでキメていたからである。
だがその勘違い氏――
「オレの名は三芳礼治(みよしれいじ)。ジョニーと呼んでくれ」
――ジョニーは、周囲でパニックを起こす人々とは違い、落ち着い

ていた。
俊樹は花蓮と目配せし、頷き合うと即断した。
「……お願いします。助けてください」
パワーウインドウが開く音がして、俊樹はそちらに目を向けた。開いた窓の内側から高い声がかけられる。
「ねえジョニー。誰、この人たち」
漆黒のストレートロング。助手席に座っているのは、小学校高学年くらいの女の子だった。
「ロックなハートのお兄さんたちだぜ、マリー」
「そう」
にこりともせずに返事をした女の子は、俊樹と花蓮には笑顔を見せた。
「鍵、開いてるわよ。どうぞ乗って」

車に乗ってからしばらく、誰も何もしゃべらなかった。それというのも、慌てすぎてハンドル操作を誤り、雪道で立ち往生する連中が後を絶たなかったからだ。
そんな中、ジョニーは神がかったハンドル操作で先を走る車の脇をすり抜け、あっという間に他の車がほとんどいない通りまで走破してしまった。
後部座席で肝を冷やす俊樹たちを尻目に、マリーは平然とカーラジオのスイッチを入れる。顔を後ろに向け、話しかけてきた。
「ちなみにあたし、茉莉（まり）。ジョニーの娘で小六よ。茉莉でもマリーでも、好きな方で呼んで」
「あたしは花蓮。彼は俊樹でふたりとも大学一年よ。ねえマリー。お父さんっていつもこんな運転なの？」
「ご想像にお任せするわ、花蓮」
花蓮はほんの一瞬虚空を見上げたが、すぐにマリーへと視線を戻

した。
「……この話題はやめておくわ。マリーは恐くなかった？　あのUFO……。あたしは恐くて、しばらく声も出せなかった」
「あたしらはロッカー。歌えればそれでいい。そんで、生活にスリルがあればもっといい。今夜はなかなかスリリングじゃない。充分楽しいわ」
　迷いなく言い放つマリーの横で、ジョニーはニヤニヤしながら運転している。
「あ、そう……」

　その後、花蓮が告げた彼女の自宅へ車を向かわせようとしたジョニーだったが、UFOどもを避けられそうな迂回路は全て、事故車や渋滞などで塞がれている有様だった。
「携帯は使えねえけど固定電話なら連絡できるかも知れん……と言っても、どこまで走っても見あたらねえな、電話ボックス。こりゃ、最悪の場合朝まで車中泊ってことで」
「構わないわ。朝帰りしたからっていちいち目くじらたてるような親じゃないもの。……あ、朝帰りって言っても女友達とカラオケオールナイトとかそんなのばっかりだけどねっ」
　なぜか窓の外へ視線を逃がしながら言う花蓮を、マリーはにやにやと見つめていた。しかし、口を開いたマリーは花蓮にではなく俊樹に話しかけた。
「俊樹ってロッカーなんでしょ。さっきジョニーがそう言ったわ」
「俺は高校の時合唱部にいたから歌は好きだけど、特にロックが好きってわけじゃないよ」
　そう俊樹が答えると、ジョニーが割り込んできた。
「あんたは立派なロック魂を持ってるぜ、トシ」
「ト……トシ？」
「聞いてたぜ。さっき、『恋人を置き去りにするのか意気地なしめ』ってさ。それも、自分の車を盗った相手に。しびれるじゃねえか」

「しびれる？」
目を眇めて聞き返す俊樹に、マリーが解説してくれた。
「死語よ。それも、ジョニーが生まれる前の。感動したことを表す言葉だそうよ」
「あ、そう……」
知らず、つい先程の花蓮と同じように脱力した返事をする俊樹。
その時、ジョニーは鋭く細めた目でカーラジオを睨みつけ、「しっ」と声に出して会話を制した。
『……政府特別緊急放送です。本日午後十一時現在、我が国は緊急事態に対応するため超法規的措置を実行しております。日本全土に戒厳令が発令されました。国民の皆さんには許可無き外出を禁止します。現在我が国は何らかの事故またはその他の要因により、インターネット・地上デジタル等の情報インフラを寸断され、政府広報はアナログラジオ放送に頼らざるを得ない状況です。諸外国との連絡も途絶しております。いずれ続報をお伝えします。今後しばらくの間、ラジオでお伝えする情報に従って冷静に行動してください。この厳しい状況への対処は自衛隊を加えた政府特別対策チームにて行います。対策チームには即時発砲を含む超法規的措置が適用されます。国民の皆さんはくれぐれも外出しないように。繰り返します。政府特別緊急放送……』
同じ文言ばかりが繰り返し放送されている。沈黙が支配する車の中、まずジョニーが声を出した。
「ふっ。くくくく」
マリーがそれに続く。
「うふふ。あはははは」
笑う二人を交互に見た俊樹は、尖った声を出す。
「これはとんでもない事態ですよ。何がおかしいんですか」
「そうですよ。政府は既にＵＦＯに気付いてて、自衛隊を含めて対処に乗り出してるってことでしょ。早くどこかの建物に避難しなきゃ」

花蓮も焦った声を出すが、ジョニーは意にも介さない。
「わかってねえな、トシもレニーも」
レニーとは花蓮のことであるらしい。前方を見たまま話すジョニーの声は、心なしか低めになっていた。
「今の放送、携帯のけの字もなかったよな。トシが気付いたこと、政府はともかく自衛隊が気付いてないと思うか？」
ジョニーの真意がわからず、俊樹と花蓮は後部座席で互いに顔を見合わせた。振り向いたマリーは笑みを浮かべたまま告げる。
「俊樹も花蓮もしっかりしてよ、あたしより歳上なんだから。日本の政府ってば、何かコトが起きるととにかく情報収集とか言いながら絶望的なくらい初動が遅いでしょ。それが何故今回、こんなに素早いのかしら」
マリーの説明を受けて目を見開く俊樹に対し、花蓮はもの問いたげな視線を向けた。彼女にもマリーにも視線を合わせず、俊樹は虚空を睨むようにして自分の考えを述べる。
「海外の緊急事態についての第一報をマスコミ報道で知るような無能政府にしては、確かに今回の動きは早すぎる。ネットと地デジがダメでもラジオなら大丈夫と気付き、あまつさえ超法規的措置の決断まで済ませている……有り得ない。つまり」
「そうよ。あのＵＦＯ連中による偽装放送か、政府そのものが乗っ取られたか。そんなところじゃないかしら」
笑みを消し、声を低めて言い放つマリー。
「は……。だめだ、笑えない」
続けようとした言葉と一致する内容をマリーの口から聞かされ、なおも笑い飛ばそうとした俊樹だったが、彼にはお手上げのポーズをしてみせることしかできなかった。
「さて、どうしたもんかな」
ジョニーは、あくび混じりにそう言った。弾かれたように反応した花蓮が裏返った声を立てる。
「まさか！　ＵＦＯに立ち向かおうとか言うんじゃないでしょうね、

ジョニーさん」
ちらと聞いた本名を思い出せず、つい渾名の方で呼びかけてしまった花蓮。今ひとつ締まらない空気の中、飄々とハンドル操作を続けるジョニーは、彼女の言葉をあっさりと否定した。
「するわけないさ、レニー。さっきの攻撃はオレもこの目で見た。あんなもん、銃で立ち向かっても敵いっこないぜ。どうしたもんかなと言っておいて何だが、オレたちゃロッカー。やることは一つだ」
再び後部座席に背を落ち着けて顔を見合わせる俊樹たちに対し、振り向いたマリーは顔を傾けてウインクして見せた。
「歌うだけよ」
あっけにとられた俊樹たちが絶句すると、そのまま会話もなくなった。
それから十分ほど無言で運転を続けたジョニーは、一軒のライブハウス前で車を停めた。
「ここで歌うんですか、ジョニーさん。もうこんな時間だし、開いてないでしょう」
車を降りて向かい合うジョニーと俊樹の間を、黒髪をなびかせてマリーが横切っていく。男たち二人の胸元までしかないその背丈を見て、俊樹はようやく彼女が小学生である事実を思い出していた。
「ジョニーはここのオーナーなのよ。で、二階があたしたちの住居」
告げるマリーの手には鍵が握られていた。

飛び散る汗がスポットライトを反射して輝く。フォグに包まれたステージ上でジョニーが身体を折り曲げる。自らかき鳴らすギターの音色は本格的だ。
演奏しているのはどうやらオリジナルだが、雰囲気は衣裳同様八〇年代の曲調だ。まさに――。
「シャウトが炸裂する……という表現がピッタリだな。古いけど、

古くさくはない」
爆音とも呼べる演奏の中、俊樹の呟きは隣にいる花蓮の耳にも届かない。
いつの間にかジョニーの隣に寄り添ったマリーが、澄んだ声を張り上げる。彼女の高い声はジョニーの太い声と意外にも相性が良い。無理に大人びた歌い方はしていないし色気と呼ぶべき雰囲気も醸してはいないが、マリーの歌声は古い雰囲気の曲に華やかな彩りを加えた。
親子の歌声に耳を傾けながらも俊樹は、目だけを隣に向けて（一緒に歌いたいな、花蓮と）と胸中に呟く。
一曲歌い終えたジョニーに感想を求められ、俊樹は言葉を選びつつ答えた。
「ロックのことはよくわかりません。正直言うと新しさは感じませんが、かっこいいとは思いました。マリーはとても良い声です。歌い方の基本がしっかりしてて、特に高い声が良く伸びますね。俺としては、マリーに讃美歌を歌って欲しいと思いました」
ジョニーは満足げに頷くと、満面に笑みを湛えて俊樹の背中をばんばん叩いた。
「うれしいぜ。よーし。オレの演奏でよければ全員で讃美歌を歌おうぜ」
「全員！？　待って待って、あたし讃美歌わかんない」
慌てる花蓮に、ジョニーは親指を立てて見せた。
「讃美歌って言ってもオレが演奏できるのは『きよしこの夜』とか『もろびとこぞりて』とか、誰でも知ってる奴だけさ」
「それって讃美歌だったのね。ならあたしにもわかります」
ジョニーによるギターの音量を抑えた伴奏のもと、四人での合唱が始まった。
「思った通り。花蓮の歌声、すっごく素敵……」
ジョニーが挙げた二曲を歌い終えたところで、マリーがそう呟いた。それを聞きとがめ、すぐにジョニーが窘める。

「こらマリー。俊樹の台詞を奪うんじゃない。聖夜に恋人たちの邪魔はするもんじゃないぜ」
「げふっ」
ジュースを飲んでいた俊樹がむせた。
「なにやってんのよ俊樹」
背をさする花蓮に手をあげて感謝を示すと、俊樹は「マリーに台詞とられたよ」と言って微笑んだ。姿勢を正して彼女の正面に立つと、相手の目を真っ直ぐに覗き込む。
「な……なに」
心持ち頬を赤らめる花蓮の前で深呼吸し、告げる。
「俺たちただのバイト仲間だし、外でＵＦＯが暴れ回ってる時に言うことじゃないかも知れないけど……。一緒に歌ってみて、はっきり感じたんだ。花蓮。キミを恋人にしたい。俺と、つきあってほしい」
両手を口に当て、しばらく花蓮は固まった。その頬は真っ赤に染まっていく。やがて、直前の俊樹と同じように深呼吸した花蓮は、両手を口元からどけた。
彼女はいったん視線を下げ、再び俊樹の視線を真正面から受け止める。そして口を開こうとした、その途端――。

破裂音。風船が割れる音を耳許で聞かされたかのような錯覚に襲われ、場の全員が首をすくめる。

「全員手を挙げろ。貴様等には国家反逆罪の疑いがある」
硝煙の臭いと共に、制服姿の男たち四人がライブハウスに乱入してきた。
「なんだお前ら。旧日本軍？」
さりげなく三人をかばう位置に移動していたジョニーは、手を挙げながらそう呟いた。
ジョニーが言う通り、乱入した男たちの制服は自衛隊のものでは

なく、戦争映画に出てくるような古めかしい制服だ。抱えている武器も三八式歩兵銃（さんぱちしき）――銃口前方下部に刃渡り三八センチの剣を備えた銃剣――である。
先頭の兵士だけは他の兵士と違い、袖口にラインがある。おそらく指揮官と思われるその男が、ジョニーの疑問を無視して大声で告げる。
「我々政府特別対策チームには即時発砲の権限がある。貴様等容疑者は、本来であれば遅滞なく射殺の刑に処すべきところ、今しばらくの猶予をくれてやる」
ジョニーは挙げた手を後頭部で組むと、呆れた声で聞き返す。
「いろいろと突っ込みたいところだが、その前に。オレたちが一体何をしたってんだ」
「とぼけても無駄だ。貴様等が歌っていたのはわかっている。周辺住民からの密告があった」
見開いた目を細めたジョニーは、気の抜けた声で「それがどうした」と呟いた。
「ふむ。どうやら貴様等、ラジオを聞いていないようだな。よかろう、教えてやる」
指揮官は胸を張ると高らかに宣言した。
「我々はノエルスフィア星人である。君たち地球人との共存を目的にやってきたのだが、このたび事情が変わった。急遽日本政府を乗っ取らせてもらったので、以後日本国民は我々の指示に従ってもらう」
「あーそー」
組んでいた両手で後頭部をぽりぽりと掻き始めるジョニー。彼は、前に出ようとする俊樹に気付き、視線で制した。
「信用するもしないも自由だ。ただし、行動の自由を与えるわけにはいかない」
「それで、宇宙人さんよ。オレたちをどうしようってんだ」
「何、難しいことを要求するつもりはない。ただ、今後は歌を歌わ

ないことを誓ってもらい、それを守ってもらうだけでいい」
「……はぁ？　意味がわかんねえ」
指揮官以外の三人の兵士が一斉に銃を構えた。いずれの銃口もジョニーに向けられている。
それらを手で制した指揮官は、穏やかに言った。
「これは取引だ。我々とて無闇に地球人を殺戮したいわけではない。相応の交換条件を用意し、それを日本政府が呑んだというわけさ。従って貴様等日本国民どもには選択権はない」
ジョニーはぎり、と歯を鳴らす。
「オレたちから歌を奪う、だと。どんな交換条件なんだ」
「せいぜい百年しか生きられない君たち地球人、いや日本人の寿命……それを倍増する。付随する問題として、人口問題・食糧問題・エネルギー問題などにも我々の母星の技術を提供する」
「ほう」
ジョニーの額に青筋が浮いている。
「随分と気前の良いことだ。そうまでして俺たちから歌を奪うメリットは何なんだ」
「これ以上のことを教えるつもりはない。嫌ならこの場で射殺する。歌を歌うそぶりを見せるだけでも射殺する。さあ誓え、歌を歌わないと」
指揮官を含む四人の銃口が構えられた。
ジョニーは一度、背後を振り向く。
俊樹は花蓮と頷き合い、マリーとも頷き合うと、ジョニーを真っ直ぐに見て大きく首を縦に振った。
ジョニーは謝罪するかのように目を閉じると兵士たちを睨み付け、告げる。
「嫌だ。誓わない」
――雷鳴。
強烈な閃光に、その場の全員が目を閉じた。

俊樹はおそるおそる立ち上がる。身体のどこも痛くない。見回すと、花蓮もマリーも、そしてジョニーも同じように立っている。
正面を見て息を飲んだ。
人型の炭が四つ、床に転がっている。
ゆっくりとライブハウスの入口に目を遣ると、開け放たれた扉の向こうから光が射し込んでくる。光源にいるものは、確かめるまでもない――ＵＦＯだ。

（君たちの勇気に敬服する。我々は銀河パトロールだ）

頭の中に響く声。俊樹は他の三人と顔を見合わせ、みな同じようにＵＦＯの声を聞いていることを知った。
ジョニーがＵＦＯに話しかける。
「銀河パトロールだって？　じゃ、この四人は」

（ノエルスフィア星人、指名手配中の宇宙海賊。奴らは、特に歌が好きな地球人から歌を――希望を奪うことで特殊能力を強化していたのだ。君たちが彼らの脅しに乗らなかったこと、心から感謝する）

俊樹は我慢できず、詰問口調になる。
「ちょっとまて。あんたたち、地球人を攻撃していただろう」

（驚かせて申し訳ない。奴らは地球人に偽装した宇宙海賊だ。……すまない、時間だ。我々はこれより、宇宙海賊どもによる破壊工作の数々を元に戻すための作業に入る。君たちの建物の後片付けには協力できないが、許して欲しい。では、メリークリスマス）

光が去っていく。
呆然と立ち尽くす四人の中で、最初に動いたのはジョニーだ。
「扉が壊れちまってて少し寒いが、歌うぜ！」
Ｗｅ Ｗｉｓｈ Ｙｏｕ ａ Ｍｅｒｒｙ Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ，
Ａｎｄ ａ Ｈａｐｐｙ Ｎｅｗ Ｙｅａｒ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8846z/

What makes my heart sing?

2011年12月29日12時57分発行